フィールド（現場）からの風 485

宮田守男

心の自由を抱き続けることが大切だ

ヘルマン・ヘッセの詩「書物」の一節に「この世のあらゆる書物もおまえに幸福をもたらしはしない。だが、書物はひそかに　おまえ自身の中に立ち帰らせる」と。確かにコロナ禍での自宅で過ごすあり余った時間、積読状態だった諸本を読む時間が多かった。

ノーベル物理学賞を受けた益川敏英・京都大学名誉教授はインタビューで「のりしろ」の多い人生を送ったという。余裕のない人生は送りたくないし、好きなことを自由にやりたい。面白いことがあれば何にでも手を出す「のりしろ文化」を実践した。ゆとりの意味にも用いられるのりしろを、「心の自由に置き換えた」と。これからの人生を前向きに捉えて行かなくてはと考えさせられる。

北京パラリンピックで参加選手の活躍をテレビ映像で楽しむ機会が多かった。何よりうれしかったのは、パラリンピックを「スポーツ」としてパラリンピアンを「アスリート」として捉えるというコンセプトがしっかり定着していた事だ。

長野パラ準備段階では、現在とは違い「身体なり何なりに障がいを持っている人が頑張る姿を応援しましょう」というイメージが強かった。それに対してパラの取材や撮影に際し「スポーツとして捉えよう」と尽力したのが信越放送の製作部に所属して、主にテレビ番組の制作に関わっていた村山隆さんだった。

長野五輪では、ORTO（国際映像制作）のメンバーとして表彰式会場のプロデューサー、番組制作の責任者としても活躍。長野パラでは長野県中野市出身の久石譲氏が総合プロデューサーで選ばれ、開会式で用いられた「野沢の火祭り」の構想の発端は村山さんだと当時話題にもなった。

その後信越放送総務部付部長で（株）コンテンツながの取締役として白馬村の観光発展にも尽力いただいた事を思い出した。この頃の信越放送はラジオとテレビにプラスして事業、イベント・コンサート・美術展開催や出版関係も活発で長野パラ公式写真集の制作も手掛けた。

長野五輪。パラでの白馬エリアでの事業協賛企業への取組検討会議は信越放送の会議室だった、博報堂、共立プラニング、信越放送事業部、白馬村実行委員会の担当者会議は長時間の激論が繰広げられた。この会議に参集した、情熱ある人との、本当に良い出会いでもあった。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

３月中旬の積雪状況は観光関係者には朗報だが、農業関係者は雪解けが気がかりだ